

「特別活動の指導法」における授業法の報告

上 憲治
帝京短期大学

Report of class method of in 「guidance method of special activity」

Kenji kami
Teikyo Junior College

【目次】

はじめに

1. テキスト理解のワークショップ

- (1) 導入
- (2) ワークショップの展開

2. 特別活動実践企画作業

- (1) 計画を立てる
- (2) 企画書を創る
- (3) プレゼンテーションの実施

3. 評価と改善

- (1) 平成 19 年度授業評価
- (2) ワークショップ アンケート調査

はじめに

特別活動の授業は2単位で1コマ90分、半期で15回開講されている。シラバスは次のようである。(参照「帝京短期大学平成20年度講義要項」)

図 1

学習目標及び内容	学校教育における「特別活動」の意義や内容を知り、教育方法について検討する。グループ編成をし、実際に「特別活動」の指導計画を作成する。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1 授業の方針と手順と説明 2 特別活動とは何か1 3 特別活動とは何か2 4 小テスト 5 ワークショップの説明と準備 6 テキスト研究のグループワーク第1回 7 テキスト研究のグループワーク第2回 8 各グループワーク第1回発表会、研究レポート提出 9 テキスト研究のグループワーク第1回 10 テキスト研究のグループワーク第2回 11 各グループワーク第1回発表会、研究レポート提出 12 特別活動企画ワーク第1回 13 特別活動企画ワーク第2回 14 特別活動企画ワーク第3回 15 特別活動企画プレゼンテーション、企画書提出
成績評価の方法・基準	提出された研究レポート、企画書と評価表によって評価する。グループ作業に取り組む態度やプレゼンテーション時の発表内容や態度も参考にする。

本講義の概要は①特別活動についての理解と②特別活動の指導シミュレーションを実施するところにある。また③特別活動で重要なことは学校あるいは学年全体での教職員の協力と連携をすることにもある。④さらに会議等で全員に周知するプレゼン能力を身につける、である。上記4点を同時に取り組む方法として、ワーク・ショップをとりいれている。

ワークショップでは内容別に3つの作業に取り組む。

1. まず特別活動についてのテキストを各ワークで理解する作業に取り組む。
2. 次にテキストの理解に応じて特別活動の実践的企画を組み立てる作業を行う。
3. 評価と改善について

1. テキスト理解のワークショップ

テキスト理解のワークショップは次のような順に展開している。

(1) ワークショップの導入

- ①はじめにこの授業のやり方を十分に説明し、ワークショップに取り組む姿勢に入るようにする。
- ②次に特別活動について基本的なことを説明し概要を理解させる。
- ③この時点(今回は3講義日)で1回小テストを実施し、理解のほどを確認する。この時点での理解状況は下表のようである。系列は2クラスのそれぞれを示し、明らかにクラスによって理解度が異なっていることがわかる。(5段階表示で5が最も高い。以下の表も同じ。)

図 2. 第 1 回クラス別習熟度数

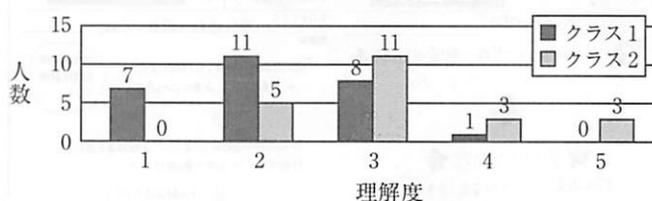
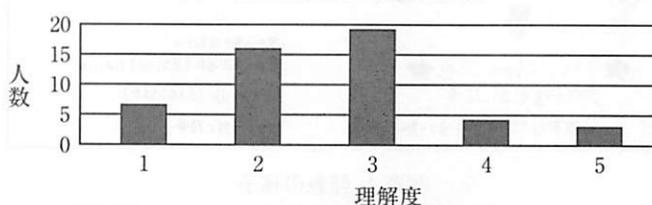


図 3. 第 1 回全体の別習熟度数



全体では、この時点ではかなり理解度が低い状況である。

(2) ワークショップの開始

次にワークショップに入る。ワークショップではグループごとにテキストの割り当て部分をまとめて発表する。その手順は次のようになる。

- ①グループ編成は5から6人で、1クラス5から6グループとなる。テキストをまとめる担当の量は1人当たりの担当量が適量であるように配分する。

②個人のまとめカード形式 1 事例

個人のまとめカード作成留意点は、章や論文のポイントを的確につかみ、カード化し、次にそれをグループ内で口頭にて説明できるよう

にしているところにある。各人の担当部分は自分ひとりであるから責任を十分に自覚して報告するように指導している。

この点の問題点は担当者が怠けるとグループにとってその部分がブランクになり、担当者の学習も進まないという点である。担当者が怠けることを改善することは一つの課題だが、グループにとってブランクになる点はグループの他のメンバーが補充するというで解消できている。

図 4

個人の担当部分レポート	
第1章(4) 担当者	学籍NO. [] クラス A3 氏名 []
論文名(執筆者)	
特別活動の計画	
<p>要点(できるだけ短く、箇条書きで、ポイントだけ)</p> <p>① 評価の原理</p> <p>・評価=点数主義のイデオロギ</p> <p>② 卒業成績・全人格の発達を評価すること</p> <p>・特別活動は尺度があいまい</p> <p>PLAN(教育計画)-DO(教育活動)-SEE(教育評価)というサイクルの提唱</p> <p>③ 本来の教育目標は、教育計画に基づき実践によってどの程度達成し、成果をあげ得たのかが問われる。(二次の教育計画の指針)</p> <p>④ ねらいと計画</p> <p>⑤ 計画に基づいて実践</p> <p>⑥ 個人としての到達、集団としての到達の照合</p> <p>⑦ 留意点</p> <p>⑧ 各観点に全人格的理解に努める</p> <p>⑨ 教育実践の至り處として行う</p> <p>⑩ 校長と意見を総合的にとらえる</p>	<p>⑪ 継続性や一貫性に欠ける側面をもち</p> <p>⑫ 評価後の指導に重点を置く</p> <p>⑬ 「人間としての生き方」=発達の特徴・自己の個性・適性の自己受容・理解を深め、倫理や判断を養い、主体的に選択し決定する態度</p> <p>⑭ 生徒理解 ⑮ 日常生活的理解 ⑯ 診断理解 ⑰ カウンセリング的理解</p> <p>⑱ 評価記入</p> <p>⑲ 「特色2事項(はし)」→理解度が低い</p> <p>⑳ ボランティアの参加はどの程度能率的に開き有効に評価をするか</p> <p>㉑ 資料は9月分は「加いほよい</p> <p>㉒ 発展的・体系的には特別活動を軸に作られ、具体的には指導計画策定のステップとする。全教員職員の理解と協力が不可欠な条件となる</p>

③ グループ担当発表用レジメ事例

プレゼン時にはレジメとは別に説明用手元資料を作成して、それを用いるグループも多い。次はその1例である。

図 5

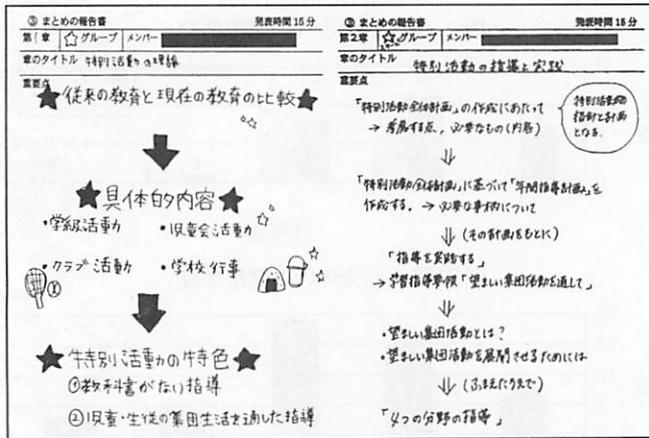
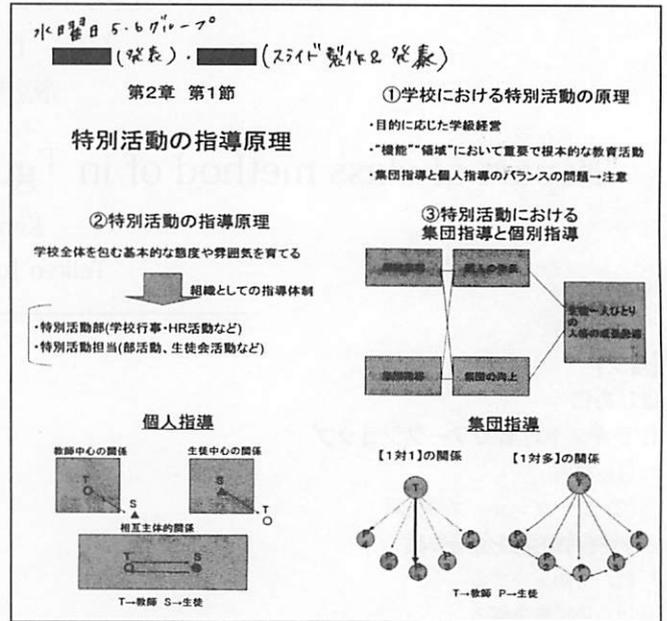


写真 1. 発表の様子



図 6



④ 発表は各グループの代表が1名、プロジェクターを使って行う。このために、各グループは発表時のレジメ、手元資料、プロジェクター用スライド(原則パワーポイント使用)等の作成、プロジェクター用補助者等の役割分担をする。

一方、発表を聞く学生側は各発表について評価とそのコメントを記録しなければならない。そのフォーマットと事例は以下のである。これは成績評価時に加味する。

図 7

第1章 ⑤ までの報告会記録			
第1章	発表要点	時間	評価点
△	レジメがなければいって事とわかってたのと、これもわかりやすかった。時間もちょうどよかった。	12分 5	4
■	内容 4 レジメ 4 内容 4 スライド 4 計画性 4	10分	4
○	ポイントがまとまっていたことも良かった。PPから見て、すくなくわかりやすかった。図とか活用していたこともわかりやすかった。時間もちょうどよかった。	13分	5

2. 特別活動実践企画作業

この作業はワークショップを十分に活用して進める。ワークはテキスト理解のワークをそのまま継承する。学生には第2のステップに入ったことを十分に理解し、創造的な作業に取り組むように指導する。特別活動の企画対象は特別活動の内容であり、その中から各グループで1つだけ選定する。

(1) 計画を立てる

まず企画を立てる作業を行う。特に未経験な作業であるので取り組

み方を具体的に提示しながら進めていく工夫が重要である。その要諦は①企画に取り組むための分かりやすい説明が必要である。②また企画を立てていくモデル的な作業形式によって円滑に作業を進めていけるようにすることが肝心である。またその計画内容はできるだけ緻密で様々なことに配慮するようにアドバイスする。次はその作業上必要な作業表の形式である。

①企画に取り組むに際して、企画についての講義を簡単に行う。

②次にいくつかの作業形式や作業事例を示して企画作業のイメージを形成する。以下に図8と図9によって事例を示す。

図8：事例を運動会とし、関連するあらゆることを洗い出す作業用シートである。

これから取り組むべき作業を明らかにし、各自分担に応じて作業していく。

図8. 特別活動企画作業表1

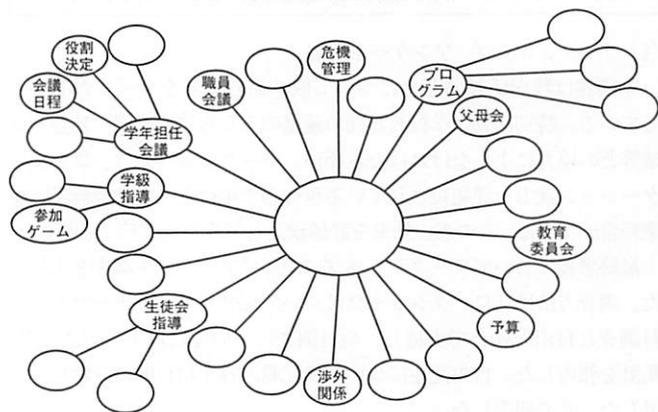


図9：図8で取り出したそれぞれの項目を図9に盛り込んでスケジュール作成と作業を内容的に整理することを行う。さらに図9のように、作業表の中の各項目について同様に作業と日程を書き出して、その作業を行っていく。

図9. 小学校特別活動（運動会）計画作業表2

日時	運動会	会議	学校全体	学級指導	渉外関係	役割分担	必要な作業	予算
2月 3月		職員会議 学年会議 運動会実行委員会						
4月			3年 修学旅行		必要物品 見積もり			
5月				参加競技 決め			マラソン コース 決め	
6月			運動会 練習開始					
7月							プログラム 作成	
8月					看板作り			
9月 10日	運動会開 催予定日							

以上の作業表から項目別に計画を立てることを行う。以下のような作業シートを用いるが、シート1の例はプログラムのイメージを固めながら埋めていくような現物を作業表として用いるものである。シ-

ト2は上記図9を項目に応じて日程を縦軸に作業内容を横軸にとつて展開している。

図10

小学校特別活動(運動会)計画作業表2-1 プログラム作成 作業シート1

平成20年度○○○○小学校運動会プログラム			平成20年9月10日	
開会式	開会の辞 選手宣誓	学校長 生徒会長	○○○ ○○○○ ○○○ ○○○○	
セレモニー	体操演技 マスゲーム	全校生徒 6年生		
競技	100メートル競走 100メートルリレー競走	全学年 各クラス代表選手		

小学校特別活動(運動会)計画作業表2-1 プログラム作成 作業シート2

日時	学校全体	学級指導	渉外関係	役割分担	必要な作業	予算
2月 3月						
4月		運動会 練習開始	印刷業者 見積もり 広告依頼			予算決定 予算申請
5月						

(2) 企画書を創る

次に以上の作業をまとめて企画書を作成する。企画書は関係者全員に周知し、全員で計画を検討し、当該の特別活動をより精度の高いものにするために用いられる。関係者で何度か検討した結果、最終的な企画書が完成されるが、この授業の場合は教員がワークショップの指導過程でアドバイスし、各ワークで修正したものを最初の完成とし、クラス全員の前でプレゼンをして評価を受けることとする。最初の計画書は教員に提出され、クラス人数分を製本して、プレゼン時に配布する。

また企画書作成は作成物を洗い出し、グループ内で分担する。その際下記のような分担一覧表を提出する。この狙いはグループのまとまりと共同作業を促進するところにあるが、各学生の評価面からは一人一人が作業に取り組むように促進するところにある。

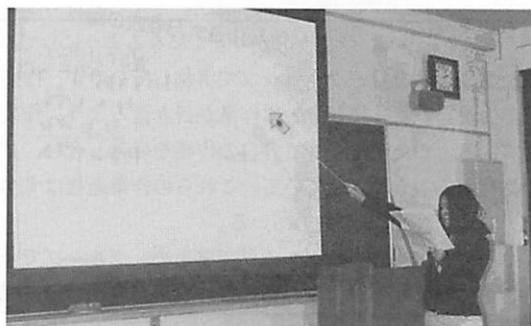
(3) プレゼンテーションの実施

最後にプレゼンテーションを実施する。クラス全員の前で各ワークは思い思いのプレゼンテーションを実施する。写真はその模様である。

図11

氏名	作業内容	備考
○○ ○○○	プログラム作成	
△△ △△△	案内状作成、礼状作成	
☆☆ ☆☆☆	会場案内図作成	
◎◎ ◎◎◎◎	プレゼン用レジメ作成	
◇◇ ◇◇◇	プレゼン用スライド作成	

写真2



以上の授業の工夫は、学生が自ら学び、自ら企画し、プレゼンを行う一連の流れをできるだけ困惑することなく展開するところにある。講義に終始する授業では学生は一方的に受け身に回り、特に「特別活動」という実践的な科目は経験によらなければ理解できないことが多い。教師の役割はこうした一連のやり方を学生がマスターしやすいように要のきいた教材を準備し、作業をスムーズに行えるように整備して与えるところにある。

3. 本授業の評価と改善

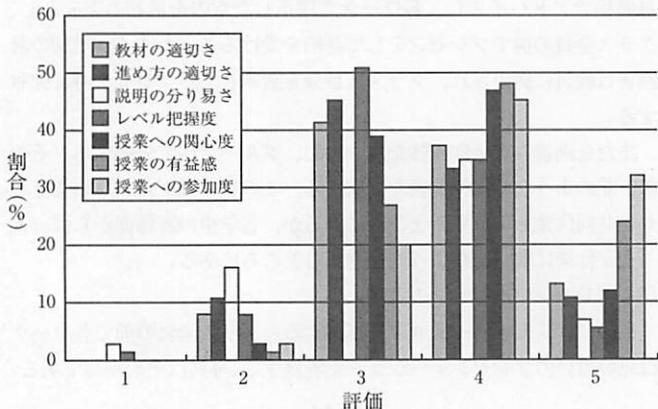
本授業の授業評価等は、平成20年度はまだ実施していないので平成19年度のもの述べる。なお平成20年度の授業評価等はこの「教育研究報告集」に掲載される予定であり、それを参照していただきたい。

(1) 平成19年度授業評価

以下は平成19年度特別活動の授業評価のグラフである。横軸に評価、縦軸にその人数割合がとられている。各評価項目は順に「教材の適切さ」「教師の進め方の適切さ」「教師の説明の分かり易さ」「教師の学生レベル把握度」「学生の授業への関心度」「学生の授業の有意義感」「学生の授業への参加度」となっている。表中の項目説明は紙面の都合上主語がかけられている。下記の評価説明は各項目の平均を出して述べている。

①授業内容については特に参加度が4.07である。かなり深く取り組んでいるといえる。「授業への関心度」は3.68、「授業の有益感」は3.95でだいぶ浸透しているといえる。

図12. 特別活動の研究評価分布 (合計75名)



②「教材の適切さ」「授業の進め方の適切さ」「説明の分かり易さ」「レベル把握度」などは顕著に良いということがないのは、まだまだ教師の授業に改善の余地があるということである。この点は平成20年度でも改善しているが、その効果は平成20年度の授業評価を待ちたい。

③平成19年度の授業改善は以下のようなものであり、これに元に平成20年度の授業を作っている。

1. 先ずテキストを替え、学生が分かり安くなるようにしてみた。
2. 次に授業全過程をワークショップで実施しているが、作業をしない学生がないように各学生に作業が行き渡るよう、作業分担させている。またグループで各自の作業を報告し合い、グループで共有するようにさせている。これらの作業過程はすべて記録として残るように資料化している。
3. グループでの個人作業はグループでまとめ、グループで一つの報告書を作成させるが、この報告書作成担当者について配慮し

なければならぬと現在考えている。つまりまとめについても誰かに任せきりで作業に加わらない学生が出ないようにするためである。

4. このレポート及び発表はパワーポインターを使ってさせている。これは情報教育との連携である。大変成果を上げたと授業担当者は評価している。この制作や、発表担当者についても仕事の偏りや、学習成果に結びつかない者が出ないように工夫することが今後の課題である。
5. 発表における課題は、大変よい発表をする発表者もいるが、寂然としない発表者もいる。もう少し高いレベルまで引き上げられるのが望ましいと思う。今後は発表態度や内容の準備にも十分配慮していきたい。
6. 最後に筆記試験によって、知識理解度をテストしたが、こうしたワークショップによって、効果があり、取得点は優秀である。

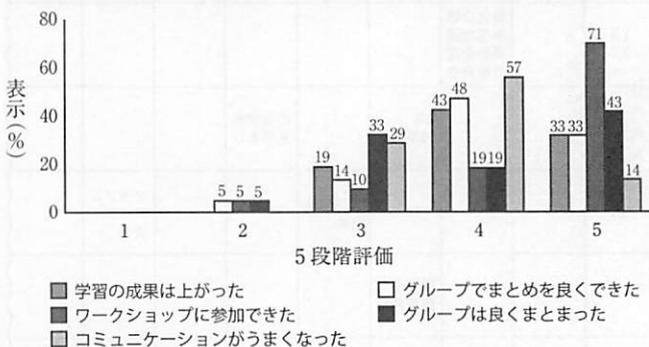
(1) ワークショップ アンケート調査

本講義は特別活動の運営について取り組むことをテーマの1つとしている。特別活動は学校教員間の連携のみならず、家庭・社会・地域等との協力によらなければならない。ワークショップは、コミュニケーション能力を課題視されている現代の学生にとっては意義深い授業経営法である。この点の効果を評価検討してみた。以下に報告する。

最終講義においてワークショップについてアンケート調査を実施した。調査方法は「ワークショップについて記せ」というテーマで、項目調査と自由記述とで実施し、項目調査については以下の①ようで、集計を報告した。自由記述については記載内容を项目的に分類し、集計した。②で報告した。

図13. ワークショップ調査

項目	1	2	3	4	5
学習の成果は上がった			19	43	33
グループでまとめを良くできた		5	14	48	33
ワークショップに参加できた		5	10	19	71
グループは良くまとまった		5	33	19	43
コミュニケーションがうまくなった			29	57	14



①この表から読み取れるポイントは「コミュニケーションがうまくなった」という項目が比較的伸びていないということである。これに関連して「グループは良くまとまった」ということにも課題があることが読み取れる。自由に作るようにした欄では「楽しかった」が最も多く、33%の学生が記入している。これは「グループは良くまとまった」の33%と同率である。ここに指導法の課題が隠れていると考え、今後の取り組み課題としたい。

②自由記述について

自由記述で頻出度の高いワードは「協力」「分担」「責任」である。成功感や反省点の両方でテーマとされている。「協力」については

25%、「分担と責任」については31%、合わせ65%になる。ワークショップではこの2点が大きなテーマとなっている。次いで意見を出し合い、みんなでまとめることの難しさが言及され、31%になる。こうしたワークショップの結果、取り組む課題（特別活動）について深く学ぶことができたという言及は41%であった。

総じてワークショップは、今後の社会性を高める課題に取り組まねばならないという自覚とその実践を深く学ぶという効果が高い、と考えられる。しかしそこには教師の用意周到な授業経営が準備されている必要がある。それを怠って臨んだ授業は惨憺たるものになる。常に工夫がかかせないのである。

おわりに

いろいろな学生たちに対応するために「特別活動の指導法」においていろいろ工夫している。学生が学習するためには学生が目的と興味を持って取り組むような授業経営が重要であり、本取り組みはそれをワークショップによって展開している。ワークショップは学生が学習や作業を行いやすいような流れやそのための道具立てを設けることで効果を上げることができる。講義から作業や、つまり受け身から参加、創造という授業方法によって学習効果を上げようという狙いである。

ワークショップについての自由記述の中に「グループワークの中で私たちは役割分担をうまくできなくて、はじめは一人の人が多くやってしまうなど、偏りがうまれました。けれど2回目は先生が分担表を作ってくれたことによってみんなで分担をしてできました。教師はそういう支援をするべきなんだなと思いました。」というものがあつた。この件については学生の状況を見て配布した（本報告書2-（2）図11参照）のだが、こうした受け止めをしてくれたことはすばらしいことだと思う。次回からは定型的な指導方法に組み入れたい。講義から作業や、つまり受け身から参加、創造という授業方法によって学習効果を上げようという狙いである。

このことが示すことは、指導方法は授業毎の工夫の中からうまれてくるものだということである。こうした方法によって、毎年新たに気付かされることが少なくなく、少しずつ改善されている。今後もそれを積み重ねる所存である。